

不登校経験のある高校生の心理的特徴の検討

ー 主張性・疎外感に着目して ー

夫馬綾子・高野恵代

要旨

本研究は、他者を攻撃せず自分の感情を表出する「主張性」と、社会生活で他者から排除されていると感じる「疎外感」に着目して、不登校経験がある高校生の心理的特徴を検討することを目的とした。不登校経験がある74名の高校生を対象に質問紙調査を行った。因子分析の結果、「主張性」は1因子、「疎外感」は4因子（自己嫌悪感・空虚感・圧迫拘束感・孤独感）であり、「主張性」と「疎外感」の相関分析の結果、すべての因子間で有意な負の相関が示された。また、不登校の原因による影響を検討したところ、「主張性」は、不登校の原因が「家庭」「本人」「無気力」よりも「学校」である方が有意に低かった。「疎外感」においては、「自己嫌悪感」では「本人」「無気力」要因に比べ「学校」要因が有意に高く、「孤独感」では「本人」要因に比べ「家庭」要因の方が有意に高かった。これらのことから、主張性や疎外感といった心理的特徴は不登校の原因によって異なることが示唆された。

キー・ワード：不登校、高校生、主張性、疎外感

問題と目的

文部科学省（2021）の調査結果によると、令和2年における不登校児童生徒数は小学校で63,350人、中学校で132,777人の計196,127人であった。小学校・中学校の在籍児童生徒数は年々減少しているにもかかわらず、不登校児童生徒数は平成24年度の調査から年々増加している。令和2年度では小学校では1.00%、中学校では4.09%の児童生徒が不登校であることが明らかとなっており、依然として、不登校に対する支援の必要性が高いことが伺える。また、現在の不登校支援に対して、文部科学省（2019）は「学校に登校するという結果のみを目標にするのではなく、児童生徒が自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指す必要がある」ことを示し、不登校期間は休養や自分を見つめなおすといった積極的な意味を持つことが示されている。

このように不登校経験に対して肯定的な意味づけが行われる場合がある一方で、支援機関へ来訪したニート状態にある若者のうち37.1%が不登校

経験者であり（厚生労働省、2019）、不登校経験者のその後の経過から、不登校者のうち2割程度は社会適応が難しい不安定な状態にとどまることが示されている（齊藤、2006）。さらに、伊藤他（2013）は、不登校生徒を受け入れる高校やそれに準ずる学校が急増し、進学を通して不登校状態から回復したものの、不登校時代を引きずり、今の自分や将来の自分に希望を見出せない生徒がいることを示している。そのため、社会的自立を最終的目標と考えるのであれば、不登校だけでなく、不登校経験者のその予後についての支援が必要であることが考えられる。

不登校経験者のその後の心理的特徴について、興津・水野・吉川・高橋（2005）は、不登校経験者の大学進学後の学校嫌い感情が低い群の方が、高い群に比べ自他への信頼が高い可能性を示した。また、伊藤他（2013）は通信制高校に通う不登校経験がある生徒を対象にアンケート調査を行った。その結果、不登校にまたいつ戻るかわからないといった不安要素が高い群は不登校に戻らないという確信がある群に比べ、自尊感情や将来への自信

が低いことが明らかになり、現在の生活に居場所感を感じ、自信を持っている生徒ほど過去の不登校を乗り越えたという感覚を有していることが示されている（伊藤他，2013）。以上より、不登校を克服した後でも、不登校によって形成された心理的特徴がその後の生活に影響を及ぼしている可能性は大きいと考えられる。そのため、不登校後の支援を検討するには、不登校経験者の心理的特徴を明らかにする必要があると考えられる。

第一に、友久ら（1997）によると、不登校前の性格特徴として自分を表にだそうとしないといった特徴が挙げられている。さらに、中学校での不登校生徒は主張性が乏しいために、他者と適切なコミュニケーションをとることが困難であり、対人関係をうまく維持できずにつまずき、疎外感を抱えていることが示唆されている（朝重・小椋，2001）。また、同輩とのコミュニケーションスキルは学校生活満足度に負の影響を与えることが明らかになっており（飯田，2003）、現状は登校しているが学校に行きたくないと感じている状態を指す不登校傾向とも負の関連性が認められた（五十嵐，2011）。このような自己主張を苦手とする中学校の不登校生徒の心理的特徴から、コミュニケーションに苦手意識がある不登校生徒が社会や集団適応をする上では、円滑なコミュニケーションを行うことや、周囲から頼まれたことに対して自分の意志を持ち、時には断るといった適切な自己主張をすることが重要だと考えられる。主張性とは、濱口（1994）によれば、他人の権利を侵害することなく、個人の思考と感情を、敵対的でない仕方では表現する主張的行動を遂行する人格的特性である。具体的な主張的行動としては、①いいえと言える能力、②頼みごとをしたり、要求したりできる能力、③肯定的および否定的感情を表出し得る能力、④一般的な会話を開始し、継続し、終わらせる能力（Lazarus，1973）を指す。そのため、不登校経験者の社会や集団での適応を考えるにあたっては、不登校経験者の自分も相手も尊重したコミュニケーションである主張性について検討する必要があるといえる。

第二に、不登校生はコミュニケーションが苦手なことから疎外感が生まれやすく（朝重・小椋，

2001）、過去に不登校を経験した者は居場所感を獲得している生徒ほど不登校を乗り越えたという感覚を有している（伊藤他，2013）ことから、その後の不登校経験者の疎外感について検討する必要があると考えられる。疎外感とは、宮下・小林（1981）によれば、集団生活や社会生活の中で自分が他者から排除されている、または他者との間に距離感・違和感を覚えるため、どうしてもなじめないという認知的感情のことである。朝重・小椋（2001）は主張性と疎外感について不登校の中学生の心理的特性を検討しているが、学校復帰した高校生の主張性と疎外感を検討する研究は未だされていない。そこで、本研究では、不登校経験のある高校生の心理的特徴についてこれまであまり注目されてこなかった「主張性」と「疎外感」の視点から検討することにする。

また、不登校と一概にいても不登校にいたるまでには様々なタイプがあることが明らかとなっている。世の中全体の風潮として、学校に行かなければならないという意識が薄れてきており、学校を休むことへの抵抗感が減っている（山田・宮下，2008）。そのため、行く意味を感じなくなった、特に理由はない等の無気力が理由の不登校のケースも確認されてきた（森田，2003）。一方で、いじめや周りに馴染めない等対人関係が問題となる場合や、保護者による虐待が背景にある等周囲の環境が不登校の原因となる場合もある。また、不安や過剰な適応努力から学校に行かなければならない、もしくは行きたいけど行けないといった葛藤や心理的圧迫を感じながら不登校に陥るケース（山田・宮下，2008）等、不登校になる理由は多様である。不登校経験者のインタビュー調査では、人間関係が不登校のきっかけとなり、現在も人付き合いが不安（森田，2003）といったことが示されており、対人関係が不登校のきっかけである場合には、不登校から復帰した以降にも対人関係における心理に影響を及ぼしていることが考えられる。このようなことから、不登校になるきっかけもその後の心理的特徴を検討する上で重要であると考えられる。

以上より、本研究では第一に、不登校経験があり、現在は学校復帰ができていない高校生の主張性

と疎外感に着目し、心理的特徴を検討することを目的とする。第二に、文部科学省（2003）の「不登校の現状に関する認識」における「不登校となった直接のきっかけ」の項目を参考にし、不登校のきっかけを分類し、不登校のきっかけによって主張性と疎外感の結果が異なるかを検討することを目的とする。

仮説は以下の通りである。第一に、主張性は対人関係で適応する能力の高さが含まれている一方で、疎外感是他者に馴染めないといった対人関係での不適応的側面が含まれている。これにより、主張性が高い人ほど疎外感は低くなる。第二に、不登校のきっかけについては、主張性と疎外感是他者の存在を前提とした概念であるため、学校や家庭に関するきっかけで不登校になった人の方が、病気や生活リズムの乱れといった本人に理由が寄与できる場合や、特に理由はない等の無気力が原因である人に比べ、主張性は低く、疎外感が高くなるだろう。

方 法

1. 調査対象者

通信制高等学校に通う高校生114名に調査を行い、不登校（1年間で合計30日以上学校を欠席）の経験があった74名（1年生28名、2年生22名、3年生24名）を分析対象とした。調査対象者の平均年齢は16.51歳（ $SD=1.05$ ）であった。

2. 調査時期と調査方法

2020年9月に実施した。Googleフォームで作成したアンケートのQRコードが記載された調査依頼書の配布を担任教師に依頼し、回答を求めた。

3. 質問紙の構成

質問紙は主張性尺度、疎外感尺度、不登校のきっかけを聞く項目、フェイスシートの4つから構成された。

（1）主張性尺度

濱口（1994）が作成した「主張性尺度」を用いた。18項目から構成されており、「いいえ」、「どちらかといえばいいえ」、「どちらかといえばはい」、「はい」の4件法で回答を求めた。

（2）疎外感尺度

宮下・小林（1981）が作成した「疎外感尺度」を用いた。「孤独感」12項目、「自己嫌悪感」13項目、「空虚感」9項目、「圧迫拘束感」10項目の合計44項目から構成されており、「いいえ」、「どちらかといえばいいえ」、「どちらかといえばはい」、「はい」の4件法で回答を求めた。

（3）不登校のきっかけ

文部科学省（2003）が作成した「不登校の現状に関する認識」における「不登校となった直接のきっかけ」の項目を参考に選択肢を作成し、最もあてはまるものを選択するように回答を求めた。その他の選択肢を選んだ場合には自由記述で不登校になったきっかけについての回答を求めた。

（4）フェイスシート

学年、年齢の回答を求めた。

結 果

1. 尺度の検討

（1）主張性尺度

主張性尺度の因子構造を明らかにするため、因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。固有値の減衰傾向および解釈可能性から、先行研究の因子構造と同様の1因子解を採用した。特定の因子に.35以上の負荷量を持ち、同時に他の因子に.35以上の負荷量を持たないことを基準に項目を選択した。その結果、どの因子にも.35以上の負荷量を示さなかった9項目を除外した（Table 1）。尺度の信頼性をみるために、Cronbachの α 係数を求めたところ $\alpha=.86$ と十分な信頼性が得られた。

（2）疎外感尺度

疎外感尺度の因子構造を明らかにするため、因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。本研究で固有値の減衰傾向および解釈可能性から、先行研究の因子構造と同様の4因子解を採用した。特定の因子に.35以上の負荷量を持ち、同時に他の因子に.35以上の負荷量を持たないことを基準に項目を選択した。その結果、どの因子にも.35以上の負荷量を示さなかった16項目を除外した（Table 2）。第1因子は「私は社会の中で、注目

Table 1 主張性尺度の因子分析結果（プロマックス回転後）

項目	I
1. 貸してほしい言われても、貸したくないときは断れる。	.74
6. 友だちが間違っただけを言っているときは「違うと思う」とはっきり言える。	.71
10. 仲良しの友だちから何か頼まれても、正しくないことは断れる。	.70
9. 買ったものが壊れていたなら、店の人に「別の物にかえて下さい」と言える。	.70
*14. やりたくないことでも、怖くて断れない。	.68
*18. 買い物をして、おつりが少ないことに気づいても店の人に言えない。	.67
15. 先生が言ったことでも、変だと思ったら質問する。	.62
2. プレゼントをもらったら、はきはきとお礼を言える。	.52
5. 友だちが良いことをしたら、いつも褒めてあげる。	.44

* 逆転項目

Table 2 疎外感尺度の因子分析結果（プロマックス回転後）

項目	F1	F2	F3	F4
	自己嫌悪感	空虚感	圧迫拘束感	孤独感
* 42. 私はこの社会に欠くことのできない貴重な存在だと思う。	.88	.03	.11	-.20
* 41. 私には人よりすぐれた何かがあるという気がする。	.87	.01	-.11	-.05
44. 私は社会の中で、注目に値しない小さい存在のように思う	.83	-.14	.32	-.20
* 43. 私は何かができる人間であると思う。	.81	.13	-.27	.14
* 38. 私は可能性に満ちた人間ではあると思う。	.77	.16	-.30	.07
* 34. 私はやる気になれば何でもできるように思う。	.71	.01	-.05	.14
* 33. 自分はかけがえのない大切な存在だと思う。	.66	.06	.00	.13
39. 「私は何をやってもダメな人間だ」という気がする。	.60	.00	.23	.08
40. 私は何の役にも立たないつまらない人間だと思う。	.58	.14	.26	.10
14. どうも日々の充実感に欠ける。	.03	.87	.03	-.10
* 15. 私の生活は実に「いきいき」しているように思う。	.12	.86	-.06	-.06
16. 毎日の生活は単調で張りが無いという気がする。	.05	.83	-.11	.00
20. 生きがいがなく、ただ何となく生きているようだ。	.13	.66	.07	-.05
13. なんの目標もなく日々を暮らしていける気がする。	.17	.66	.01	-.02
* 21. 私の生活は充実していて活気に満ちていると思う。	-.17	.55	.16	.25
30. 何か急かされ生きている感じがする。	-.28	.11	.79	-.04
28. 何かに追い詰められているような感じがよくある。	.06	-.07	.69	.13
26. 何かに縛られ自由に動けないようだ。	-.08	.23	.69	-.02
22. 毎日が緊張の連続で息苦しさを感ずることもある。	.18	-.05	.69	-.20
* 29. 比較的落ち着きのあるゆったりした毎日である。	-.02	-.30	.66	.14
* 24. 「何かに押さえつけられている」という感じはあまりない。	-.03	.13	.62	.01
25. 自分がしたくないことを、させられているような感じがよくある。	.15	.25	.38	.11
* 8. 自分は優しい人々に囲まれてなく決して一人ではないと思う。	-.11	.02	.01	.86
* 10. みんないつも暖かい心で私を迎え入れてくれるように思う。	-.08	.10	.02	.80
* 3. 私のことを真剣に考えてくれる人はいるだろうと思う。	.23	-.26	-.19	.78
35. 自分がどうなっても、そう悲しむ人はいないだろう。	-.06	.28	.05	.51
11. 私のことをわかってくれる人はいないようだ。	.07	-.02	.29	.47
2. 心を打ち明けて話ができる人は、私にはあまりいないように思う。	.14	-.12	.32	.43
因子関数	2 .59			
	3 .42	.44		
	4 .40	.28	.47	

* 逆転項目

に値しない小さい存在のように思う」、「私は何をやってもダメな人間だという気がする」等、自己に対する嫌悪感を示す項目から「自己嫌悪感」とした。第2因子は「どうも日々の充実感に欠ける」、「毎日の生活は単調で張りが無いという気がする」等、日常の生活に対する空虚感を示す項目から「空虚感」とした。第3因子は「何か急かされ生きている感じがする」、「何かに追い詰められているような感じがよくある」等、自由が低く、切迫した状態を示す項目から「圧迫拘束感」とした。第4因子は「私のことをわかってくれる人はいないようだ」、「心を打ち明けて話ができる人は、私にはあまりいないように思う」等、孤独を感じている状態を示す項目から「孤独感」とした。各下位尺度の信頼性をみるために、Cronbachの α 係数を求めたところ、「自己嫌悪感」（ $\alpha = .94$ ）、「空虚感」（ $\alpha = .90$ ）、「圧迫拘束感」（ $\alpha = .86$ ）、「孤独感」（ $\alpha = .84$ ）と十分な信頼性が得られた。

2. 主張性と疎外感の検討

「主張性」と「疎外感」の関係を検討するために、相関係数を算出した（Table 3）。その結果、主張性と疎外感の全ての下位尺度の間で有意な負の相関がみられた。自己嫌悪感（ $r = -.56, p < .01$ ）では中程度の負の相関が示され、空虚感（ $r = -.42, p < .01$ ）、圧迫拘束感（ $r = -.24, p < .05$ ）、孤独感（ $r = -.26, p < .01$ ）では弱い負の相関が示された。

Table 3 主張性と疎外感の相関分析結果

	1	2	3	4	5
1.主張性	—				
2.自己嫌悪感	-.56**	—			
3.空虚感	-.42**	.64**	—		
4.圧迫拘束感	-.24*	.43**	.44**	—	
5.孤独感	-.26*	.46**	.34**	.50**	—

** $p < .01$ * $p < .05$

3. 不登校のきっかけと心理的特徴の検討

（1）不登校のきっかけ

回答者が最もあてはまるものとして選んだ回答をもとに、対象者を学校要因、家庭要因、本人要因、無気力要因の4群に分類した（Table 4）。学校要因は「友人との関係」、「先生との関係」等

Table 4 不登校要因の具体的なきっかけ

不登校要因	具体的なきっかけ	人数
学校	友人との関係	14 (19%)
	入学、転校、進級で学校や学級に馴染めなかった	9 (12%)
	先生との関係	6 (8%)
	クラブや部活動の友人・先輩との関係	6 (8%)
	勉強が分からない	5 (7%)
	学校の決まりなどの問題	4 (5%)
家庭	親との関係・家族との不和	2 (3%)
	家族の生活環境の急激な変化	3 (4%)
本人	病気	7 (9%)
	生活リズムの乱れ	4 (5%)
	インターネットやメール、ゲームなどの影響	2 (3%)
無気力	とくに思いあたることはない	12 (16%)

のきっかけが含まれる。家庭要因は「家族の生活環境の急激な変化」、「親との関係、家族との不和」が具体的なきっかけであり、本人要因は「病気」、「生活リズムの乱れ」等のきっかけが含まれる。「とくに思いあたることはない」と回答した生徒は無気力要因とした。学校要因は44名、家庭要因は5名、本人要因は13名、無気力要因は12名であった。

（2）不登校のきっかけにおける主張性と疎外感

不登校のきっかけによって「主張性」と「疎外感」の得点が異なるかどうかを検討するために、不登校のきっかけを独立変数、「主張性」と「疎外感」を従属変数とした一元配置分散分析を行った（Table 5）。結果、「主張性」と「疎外感」の「自己嫌悪感」、「孤独感」で主効果が有意であった（主張性： $F(3, 73) = 5.96, p < .01$ ；自己嫌悪感： $F(3, 73) = 6.74, p < .001$ ；孤独感： $F(3, 73) = 3.28, p < .05$ ）。「圧迫拘束感」における主効果は有意傾向であり（ $F(3, 73) = 2.45, p < .10$ ）、「空虚感」では主効果は認められなかった（ $F(3, 73) = 1.05, ns$ ）。不登校のきっかけによる主効果が有意であった「主張性」、「自己嫌悪感」、「孤独感」においてTukey法による多重比較を行った。その結果、「主張性」では、学校要因と本人要因、無気力要因の間に5%水準で有意差がみられ、学校要因の方が本人要因、無気力要因に比べ有意に低いことが示された。また、学校要因と家庭要因間でも10%水準で有意傾向があり、学校要因は家庭要因に比べ、有意に低い傾向にあることが示された。「自己嫌悪感」では、学校要因と本人要因、無気力要因の間に1%水準で有意差があ

Table 5 不登校のきっかけにおける主張性と疎外感の一元配置分散分析結果

	学校要因 (n=44)		家庭要因 (n=5)		本人要因 (n=13)		無気力要因 (n=12)		F値	多重比較
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD		
主張性	24.11	5.41	30.20	2.49	28.92	6.08	29.58	4.80	5.96 **	学校<本人, 無気力* 学校<家庭†
自己嫌悪感	26.20	6.84	26.60	4.67	19.15	6.58	18.42	7.20	6.74 ***	本人, 無気力<学校**
空虚感	15.98	5.22	19.20	5.36	14.23	5.09	15.33	6.60	1.05	ns
拘束圧迫感	16.36	5.54	19.80	3.49	13.46	4.82	14.17	4.55	2.45 †	ns
孤独感	13.41	4.40	16.80	3.03	10.31	3.50	14.00	5.12	3.28 *	本人<家庭*

*** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$ † $p<.10$

り、学校要因の方が「本人要因」、「無気力要因」に比べ有意に高いことが示された。「孤独感」では、「家庭要因」と「本人要因」の間に5%水準で有意差があり、「家庭要因」の方が「本人要因」に比べ有意に高いことが示された。

考 察

本研究では、主張性と疎外感に着目して、不登校経験がある高校生の心理的特徴と不登校の原因による影響を検討した。本研究の仮説は、第一に主張性が高い人ほど疎外感は低くなること、第二に主張性と疎外感是他者の存在を前提とした概念であるため、学校や家庭に関するきっかけで不登校になった人の方が、病気や生活リズムの乱れといった本人に理由が寄与できる場合や、特に理由はない等の無気力が原因である人に比べ、主張性は低く、疎外感が高くなることが予想された。

主張性と疎外感の相関係数を算出した結果、主張性と疎外感の全ての下位尺度の間で有意な負の相関がみられた。これより、主張性が高いほど疎外感は低くなるという第一の仮説は支持された。したがって、他者や友人に自分の感情を表出できない、他者からの要求に対して断れない者ほど、孤独感、追い詰められたような圧迫感、日々の生活での空虚感、自己嫌悪感が高くなることが明らかとなった。

清水ら（2003）は、主張性を双方の権利を尊重しながら、自信をもって無理なく自分の思いを率直に表現するスキルと述べており、自分の感情を無理のない程度に相手に伝えることで主張性が高まり、疎外感が緩和する可能性が考えられる。しかし、不登校経験をした人の中には高校では不登

校体験を深く聞かないのが暗黙のルールとしてあった（関・田村，2017）ことや、人を信じることができなくなった（森田，2003）ことが示されており、暗黙のルールとして表面的な関わり方が求められたり、不登校のきっかけから、自分の感情を素直に表現することに苦手意識があったりすることも考えられる。近年では、アサーショントレーニングといった主張性援助を行う支援方法があり、こういったトレーニングは不登校経験者のその後の適応を考える上で有効的であると考えられる。大村（2011）は、アサーションスキルは高校生の不登校予防にも有効なスキルであることを示しつつも、高校生を対象にアサーショントレーニングを行う場合には、主体性と他者への配慮を維持しつつ、感情をコントロールして素直に自分の気持ちを表現するという、かなり高度な主張性を教える必要があることを指摘している。そのため、感情表出に苦手意識がある不登校経験者にアサーショントレーニングを行う場合は、段階を踏んで実施する等十分配慮する必要があると考えられる。

不登校のきっかけについては、文部科学省（2021）が不登校の主たる要因を調査したところ、公立の小中学校では無気力要因が47.1%と最も高く、次いで学校要因が22.6%、家庭要因が13.6%、本人要因が12.0%であった。本研究での不登校のきっかけの分類では学校要因が59.5%で最も高く、次いで本人要因が17.6%、無気力要因が16.2%、家庭要因が6.8%であった。文部科学省の結果では無気力要因が最も多いのに対して、本研究では学校要因が最も多くなった。このような結果が得られた理由の一つに、不登校の要因ごとの進学に対する意識の違いによる影響が考えられる。本研究の調査では過去に不登校経験を持ちつつも現在

は高校に進学している者を対象としている。学校生活がきっかけで不登校になってしまった場合は、高校進学を機に、環境の変化によって学校復帰しやすいことや元々学校には行かなければならない、もしくは行きたいといった進学に対する意欲があったことが考えられる。一方で、無気力である場合には高校への進学を考えるほどの意欲や動機がない可能性があり、本研究の不登校のきっかけでは無気力要因ではなく、学校要因が最も多くなったと考えられる。

そして、不登校のきっかけごとに主張性と疎外感の差を検討した結果、主張性では、学校要因の方が本人要因、無気力要因に比べ有意に低いことが明らかとなった。この結果から仮説は一部支持された。学校要因では対人関係でのつまずきが不登校のきっかけとして多く、生活リズムの乱れや病気といった本人要因、特に理由が思い当たらないという無気力要因に比べ、他者との関わり方への苦手意識から主張性が低くなったと考えられる。これは、森田（2003）の人間関係が不登校のきっかけとなった場合、その後の人生においても人付き合いが不安であることを示したインタビュー内容を支持する結果であると考えられる。もしくは、友久ら（1997）によると、不登校前の性格特徴として自分を表にだそうとしないといった特徴が挙げられていたことから、もともと主張することが苦手な生徒が学校生活での対人関係のつまずきをきっかけに不登校になった可能性も考えられる。

疎外感においては、疎外感を構成する因子のうち、自己嫌悪感では学校要因が本人要因、無気力要因に比べ有意に高かった。また、孤独感では家庭要因が本人要因に比べ有意に高かったことから、仮説は一部支持された。疎外感の中でも、自分に対しての期待の低さや周囲の役に立たない思いを示す自己嫌悪感において、学校要因と本人要因、無気力要因との間で有意差があった。これらの結果は、朝重・小椋（2001）の不登校生は他者と適切なコミュニケーションをとることが困難で、対人関係につまずき、疎外感を抱えているという結果を支持するものであると考えられる。本人要因と無気力要因は不登校のきっかけが自分自身に起因しているが、学校要因は対人関係のつまずきや

学校になじめなかったことが原因として挙げられており、学校に通いたかったもしくは通うべきだったが通えなくなってしまったという負い目を感じている可能性が考えられる。

また、疎外感の中でも、周囲の人との関係性が薄く、自分自身のことを理解してくれる人が周囲にいないと感じる孤独感においては、家庭要因が本人要因に比べ有意に高かった。家庭要因では生活環境の急激な変化や家族との不和がきっかけとして挙げられており、学校生活だけでなく、家庭内でも居場所を感じる事が難しかった可能性が考えられる。そのため学校でも家庭でも理解されたという感覚を得ることができず、孤独感が高まった可能性が考えられる。

このように、不登校のきっかけが自分に起因している本人要因と、他者との関係が関与していると考えられる学校・家庭要因との間で差が見られたことから、学校や家庭での対人関係でのつまずきや学校生活での不適応経験が、その後の対人関係における心理的特徴に影響がある可能性が示唆された。近年では無気力による不登校が増えてきているが、依然として学校生活、家庭での出来事をきっかけにした不登校生は存在している。また、伊藤他（2013）の調査では不登校から復帰した者のうち2割程度の生徒がまたいつ不登校に戻るかわからないといった不安を抱えていることが示されている。そのため、不登校復帰後において自らの感情や考えを相手も自分も尊重する形で表現することを促進することで、周囲との関係性を構築し、周囲から理解されていないという孤独感、社会で役に立たないという自己嫌悪感の減少につながる事が考えられる。居場所感を獲得している生徒ほど不登校を乗り越えたという感覚を有している（伊藤他、2013）ことから、疎外感が減少することで居場所感が増し、再度不登校になってしまいう不安を減少させ、不登校の予防につながる事が考えられる。

今後の課題

本研究では不登校経験を持つ高校生を対象に調査を行い、それぞれの不登校のきっかけによる主

張性と疎外感の差を検討した。そのため、不登校経験のない高校生の心理的特徴との比較を行うことができなかった。また、今回の調査では日々の充実感に欠けるといった空虚感、何かに追い詰められているような感じがするといった圧迫拘束感ほどの不登校要因間でも有意差は見られず、疎外感における空虚感や圧迫拘束感では不登校のきっかけの影響は少ないことが考えられる。これより、不登校になった者は皆そのような心理的特徴を持つのか、不登校経験者の主張性と疎外感是不登校経験のない高校生の主張性と疎外感とどれほど差があるのかについて不登校経験のない高校生の主張性と疎外感との比較を行い、より明確に不登校経験者の心理的特徴や不登校のきっかけによる影響を検討する必要があると考えられる。また、本研究の調査では不登校のきっかけごとのデータ数に偏りがあったため、それが結果に影響を及ぼした可能性が考えられる。今後の調査ではさらに多くのデータを集め、分析することで新たな知見が明らかになる可能性やより正確な結果が得られることが考えられる。そのため、今後はさらに追加での調査を行う等、多くのデータ数を増やして検討する必要があると考えられる。

謝 辞

本研究は、第二著者の指導のもと実施された、愛知淑徳大学心理学部2020年度卒業生の高柳奈美樹氏の卒業研究のデータを再分析したものである。また、論文執筆にあたって、山田夢さんに貴重なコメントをいただきました。心より御礼申し上げます。

引用文献

朝重 香織・小椋たみ子 (2001). 不登校生の心理について——普通学校中学生との比較から—— 神戸大学発達科学部研究紀要, 8, 1-12.
濱口 佳和 (1994). 児童用主張性尺度の構成 教育心理学研究, 42, 463-470.
五十嵐 哲也 (2011). 中学進学に伴う不登校傾向の変化と学校生活スキルとの関連 教育心理

学研究, 59, 64-76.

飯田 順子 (2003). 中学生における学校生活スキルと学校生活満足度との関連 学校心理学研究, 3, 3-9.
伊藤 美奈子・小澤 昌之・安田 崇子・星野 千恵子・福智 直美・近兼 路子…鶴岡 舞 (2013). 不登校経験者の不登校をめぐる意識とその予後との関連——通信制高校に通う生徒を対象とした調査から—— 慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要, 75, 15-30.
厚生労働省 (2019). ニートの状態にある若年者の実態に関する調査研究 Retrieved from <https://www.mhlw.go.jp/houdou/2007/06/dl/h0628-1b.pdf> (2021年12月24日)
Lazarus, A. A. (1973). On assertive behavior a brief note. *Behavior Therapy*, 4, 697-699.
宮下 一博・小林 利宣 (1981). 青年期における「疎外感」の発達と適応との関係 心理学研究, 29, 297-305.
文部科学省 (2003). 不登校の現状に関する認識 文部科学省ホームページ Retrieved from https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/futoukou/03070701/002.pdf (2021年12月24日)
文部科学省 (2019). 不登校児童生徒への支援の在り方について 文部科学省ホームページ Retrieved from http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1422155.htm (2020年12月24日).
文部科学省 (2021). 令和2年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について 文部科学省ホームページ Retrieved from https://www.mext.go.jp/content/20211007-mxt_jidou01-100002753_1.pdf (2021年12月24日)
森田 洋司 (2003). 不登校—その後不登校経験者が語る心理と行動の軌跡 教育開発研究所
興津 真理子・水野 邦夫・吉川 栄子・高橋 宗 (2005). 不登校経験と進学後の学校嫌い感情との関連 2 聖泉論叢, 13, 39-40.
大村 香奈子 (2011). 高校生の学校適応と社会的

- スキルおよびソーシャルサポートとの関連——不登校生徒との比較—— 近畿大学総合社会学部紀要, 1, 23-33.
- 齊藤 万比古 (2006). 不登校の児童・思春期精神医学 金剛出版
- 関 鋼二・田村 節子 (2017). 不登校経験者が不登校経験を意味づけていく過程に関する研究——就学・就業をした中学時不登校経験者へのインタビューを通して—— 東京成徳大学臨床心理学研究, 17, 135-144.
- 清水 隆司・森田 汐生・竹沢 晶子・赤築 綾子・久保田 進也・三島 徳雄・永田 頌史 (2003). 日本語版 Rathus Assertiveness Schedule (RAS) の作成と信頼性・妥当性の検討 産業医科大学雑誌, 25, 35-42.
- 友久 久雄・足立 明久・松下 武志・忠井 俊明・林 徳治・内田 利広…児島 龍治 (1997). 学校不適応行動の本態解明とその対応について——不登校前行動をとおして—— 京都教育大学紀要, 90, 53-69.
- 山田 裕子・宮下 一博 (2008). 不登校生徒支援における長期目標としての自立とその過程で生じる葛藤の重要性の検討 千葉大学教育学部研究紀要, 56, 25-30.

The psychological traits of high school students who have experienced not attending school:
Focusing on assertiveness and alienation

Ayako Fuma and Yasuyo Takano

Abstract:

This study was aimed at examining the psychological traits of high school students who have experienced not attending school for an extended period, focusing on "assertiveness," i.e., expressing emotions without being offensive to others, and "alienation," i.e., feeling socially excluded from others. We conducted a questionnaire survey among 74 high school students who have experienced not attending school for an extended period. Results of factor analysis showed a significant negative correlation between "assertiveness" as one factor and "alienation" as four factors; namely, loneliness, feeling of emptiness, sense of restraint and pressure, and self-disgust. In addition, when we examined the effects of the causes of absenteeism, "assertiveness" was found to be significantly lower when the cause of absenteeism was attributed to "school" than when the cause was attributed to "home," "the individual," or "lethargy." In terms of "alienation," "loneliness" was significantly higher for "family" as the factor than for "the individual" as the factor; while "self-disgust" was significantly higher for "school" as the factor than for "the individual" and "lethargy" as the factors. These results suggest that psychological traits such as assertiveness and alienation differ depending on the cause of absenteeism.

Key words: absenteeism, high school students, assertiveness, alienation